![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　令和元年１０月号（20191031）　　　　　　　　　　　　　　　園長　平澤　正則

ダイバーシティー（多様性）を考える

　この言葉を最初に聞いたのは12，3年前でした。意味もわからず，海にでも潜るのか？などと思ったものです。最近では耳にすることも多くなり，多様性の重要度を訴える記事やニュースが増えたと思います。

　多様性とは何かというと，大きく二つに分けられるようです。一つは，外見から判断できる表層的なもので，例えば，性別，年齢，人種・民族，障害の有無など。もう一つは，見た目では分からない深層的なもので，出身地・居住地，家族構成，学歴・職歴，知識・技能，宗教，習慣，コミュニケイションスタイル，マネジメントスタイル，経済力，社会的地位などです。本を読めばこのようなことが書いてあります。

　しかし，考えてみればこのような違いは昔からあったし，それを乗り越える努力もずっとやってきたわけですからなにも新しいことではないのではないかなどと初め考えたのですが，よく考えてみれば，日本では多様性より，統一性，同一性などが重要視されてきたことに気付きます。私が覚えているのは５，６０年前のことですが，学校では子どもたちが校庭に集まる時はその度に何度も何度も「前へならえ」を繰り返され腕が痛くなり，それが嫌でした。それ程，他にならうことが重要だったのでしょう。その名残は今でも至る所にあると思います。

　今行われているラグビーワールドカップの日本代表チームは5カ国からの出身者で構成されていたそうですが，大変まとまりのあるチームであると評判です。いろいろな国から集まった選手たちがインタビューに応じて口にした「ワンチーム」などは，これからの日本社会の進むべき方向を暗示しているのではないかとさえ思われます。

　石岡善隣幼稚園においても例外でなく，ダイバーシティーを軽んじては経営が成り立ちません。先生一人ひとりの違いや特色をいかに活かしていくか。生れも育ちも，好みややり方も違う先生方がそれぞれに多数の個性ある子どもたちに日々接していく時，多様性を認めずして新たな発見や創造はできません。子どもたち同士でもそれぞれの好みや違いを認め合えなければ，毎日の生活は苦悩に満ちた辛いだけのものとなってしまうでしょう。一人ひとりの異なった個性に接した時，子どもたちは何を感じ，何を考え，どう判断し，どう行動するか。そして，どう反省し，どう修正していくのか。それを生活の中で日常的に行っていくこと自体が幼稚園教育の大きなねらいの一つでもあります。そのためにもできるだけ様々な個性がいたほうが良いのだと考えます。

　まあ，以上のような言い方をしますと少々大げさな感じもするでしょうが，子どもたちが本当にいろいろな個性を見せてくれるのも事実です。一口に「子ども」といっても，よく見みればどの子も実に様々な違いを見せてくれるのは保護者の皆さんもよくわかると思います。よく見ればそれはわかるのですが，逆に言えば見なければ何も見えてこないということです。単に「子ども」にしか見えないということです。今子育て中の皆さんからすればそんなことは当たり前でしょうが，その皆さんでさえ「老人」と聞いて，様々な老人一人ひとりの違いが思い浮かぶでしょうか。

　奥に潜んだ多様性というものは見る人の見方により見えてくるものが違うとも言えます。同一人物でさえ，昨夜はパンを食べたのに今晩はご飯が食べたいというのですから。それ程人は多様性に富んだものなわけです。多様性を大切に生かしていこうとする態度が，これからの人々には一層必要になると思います。